

大地

15号
1986. 3. 20
真宗大谷派
浄国寺(23) 5724

父の思い出

長谷川 明寿

父は大変な映画好きで、よく私と一緒につれていってくれたものです。「息子よ」という映画を見に行った時のことです。それは、一人息子を殺された父の悲しみや苦しみを描いたものでした。スクリーンを見つめる父の横顔をふとみますと、父の目は、涙でうるんでいるのです。

「男が泣く時は、親が死んだ時と一万円以上落した時だけだ」と言っていた父なのですがその思いがけない涙に、私は父の内面のあたたかさを感じずにはいられませんでした。

又、野球を通して父の強さを感じる事ができました。BSN杯の試合の時。雨の降りしきる中、苦しい状況の中で、最後までマウン

ドで投げぬいた父の姿は、子供心にも大きく、強く感じられました。父はあまり私に、野球を教えてくれませんでした。多分チームをひっぱって行くことでそこまで気がまわらなかつたのでしょう。それでも何度か、キャッチボールをしてくれました。私は一度だけ父にマウンドに立った時と同じ球をなげてくれと頼んだことがあります。父はしぶっていましたが、一球、投げてくれました。それは目の前で急に速くなったような、伸びのある球で、私の手にズシンと響く、重い球でした。

私はその球の重みに父の強さが今もかさなって思い出されます。そんな父でしたが、病気には勝てなかつたようです。しかし私はいくつも考えるのです。父は面と向って病気に闘いを挑まなかったのではなかつたらうか。野球に向けたような情熱で病気に立ち向かっていったならば、あるいは病気に勝っていたのかも知れません。しかし、父の生き方は、自分自身に執着する生き方ではなかつたと思うのです。父の喜びは自分のことではなく、人の喜びであったように思います。そんな父が、自分の健康に

だけ目をくぼって生きていけなかつたのも、今うなづけるような気がします。

父は、死を覚悟していた反面、もっと生きたい生きたいと祈っていたのでしょう。母に「朝目がさめたらこの体がよくなっていけないかな」と言っていたといひます。

生と死の葛藤の中で、父は増々人間的に優しくなっていくと思ひます。「人は苦しみや悲しみを通してよりやさしくなれる」とある本にありました。父のやすらかな死に顔がそのことを物語っているように感じられました。

私は、あたたかさと強さを持ち為に生きる心を持った父を誇りに思ひます。そして父の期待にこたえ、母を大切に、教職の道に頑張って参りたいと思ひます。

＊長谷川明寿さんはこの春、新潟大学を卒業、四月からは教職に就く予定です。お父さん(成明氏)を突然亡くされたのは、昨年七月のことでした。この原稿は、故人の手柄を懐かしみ、そのあまりにも早すぎた死を惜しむ友人、知人七〇余名による「徳ぶ会」が十一月に催された時の明寿さんの挨拶です。紙面の都合で一部割愛致しましたが、転載を快諾していただきました。御味読下さい。

「越後の本当の雪」

山崎 隆 昌

毎日雪が降り続く。ただひたすら降り続く。積雪は三メートルをはるかに超え、屋根から降した雪（4回降した）と重なり、庫裡はすっかり雪の中に埋もれてしまった。全くうんざりする。些かの遠慮も無しに雪を降らす灰色の冬空に向かい、悪口雑言の限りを浴せるが気休めにもならぬ。

およそ五十年前、魚沼の商人鈴木牧之は名著「北越雪譜」を記した。その「雪竿」の項に「越後高田城の大手門の先の広場に、木を方形に削って高さを記した大きな柱が立っている。これを雪竿という。長さ三メートル。雪の量は、そのまま年貢その他の税を決める手懸りとなるからである。高田に住む俳句仲間の楓石さんから天保五年（一八三四）仲冬にいただいた手紙によると、この年高田の積雪は三メートルを超えたという。雪竿といえは越後のこととして、俳句にもよく見えるところだが、昔はともかく今は、

この高田の地で無用の雪竿を立てているところはない。風流を愛してこの国にやって来た人も、皆、雪を避けて夏の頃、越後へ着くため、越後路の本当の雪を知らない。そして、それにもかかわらず、ただ越路の雪という言葉をもてあそぶので、いろいろ奇妙なこととなつて、私たちを笑せることも多いのである。」（浜森太郎訳）

大手門の先の広場というと現在の図書館の辺りになるのである。か。玉砂利を敷き詰めた広場の中央に電柱のような方形の柱が立てられている光景は、いささか滑稽とも言えぬではないが、それが、年貢その他の税を決める手懸りともなるとすると笑えなくなる。今年高田で最高積雪は三メートルを悠かに超えたが（372cm）江戸時代の高田も随分降ったようである。何しろ三メートルの柱が埋もれ、牧之をして「無用の雪竿を立てている高田」といわせるほどであるから。

本年の正月一日の新聞に、新潟県人の県民性を形成したものとして①冬の豪雪②真宗への信仰③強い地主制度をあげて、その理由を

詳しく説明していた。越後人の、黙々として粘り強い生き方について古くから多く語られて来た。そして誰もが冬の豪雪との闘いにその因を求めている。

人々がこの雪深い越後の地に生活するようになってから、どれ位の年月が経過しているのであるか。（もともとはアイヌ民族が先住していたといわれる）

縄文式土器時代堅穴住居の中で、人々は、あるいは鎌倉時代宗祖聖人はみすぼらしい庵の中で、あるいは江戸時代その日の生活にも事欠いた水呑み百姓達は、それぞれ、その時代の中で三メートルを超え、雪と闘って来たのである。現代の機械化された生活からとて想像できない。ある人は楽天的に「昔の人の方が自然と同化していたのでは」と言う。自然とのつき合ひという意味ではそうかも知れない。

牧之が他国の人は「越後路の本当の雪を知らない」と述べている。テレビ等の発達した現代でもこの点は全く変わらず、都会人には「越後の本当の雪」を伝える事は不可能だ。美しい若葉の芽吹く春を待つ毎日である。

「雪」と暮す

山崎

睦

時季早き柚子湯を焚きて
孫と入る

炬燵居に孫が百打つ
肩たたき

地響をたてて除雪車
遠のきぬ

雪道をゆづりて園児の
礼を受く

せり出せし雪庇に永柱
ひん曲る

この冬は三年続きの豪雪。大雪も三年続くと、いささか疲れて降参したくなつた。

降ってみなければ予想のつかない冬の為に、お盆過ぎになるともうそろそろ準備を始める。しかし冬になり、雪が積り始めても見当がつかないのが毎年である。見当都会の人には、雪は素晴らしいと憧れたり、又雪深い処は辺地で、

そこに住む人達も暗くじめじめして居る様に思い込んで居ることも少なくない。でも、都会の人の思ふ程、雪国の人は暗くはない。かへって温味がある様に思はれる。それも情報化時代の昨今、大部変わって来たが……
冬になれば雪が降るものと決めて雪を上手に克服して行く。こうして落ち着いて雪と戦っておられるのも、やがて確実に春が来て、雪も消え黒土が出て大地が活きづく事を信じ切っているからかも知れない。
この雪深い地に生れ育って七十年。麗かな春の陽が射し始めると今までの雪の苦勞も薄れ、一面の残雪の山も大して苦にならない。総てが春めいて見えるから面白い。給はりし先の短い命を、大切に一杯生きようと心に張りが出て来た此の頃である。



雪がふる

小四 山崎 真尚

雪がふってきた

雪に こしまでうまっている

ひと足 ふむたび

ギュギュと 音がする

風が ふいてきた

ふぶきになって

まえが みえなくなった

顔に 雪が はりついた

とけていく

つめたさだけ のこして

とけていく

音楽雑念

山崎慎子

あるラジオ番組を聴いていた時、ゲストの好きな曲を紹介するといふコーナーがあった。その日のゲストの何気ない一言が、ふと心を捉えた。その人は脚本家で仕事をしながら音楽をかけるという。そんな時の曲はロックやポップスなどの現代音楽にほぼ決っていて、その理由に一瞬オヤッと思わされたのである。つまりその人は幼い頃からピアノやヴァイオリンに親しみ、自然にクラシックにも親しんで成長した。無論、クラシックに對する拒否反応があるというのではない。にもかかわらず、なまじっかクラシックを知っていることで、仕事の時にクラシックを流すことは逆に、その音が耳について邪魔になるのだそうである。

その話を聞きながら私は、それとよく似た感じを抱いたことを思い出していた。それは音楽科を出た友人と、とりとめのないお喋りをした時のことである。言葉の伴なう音楽の場合、曲と言葉のどちらにより反応するか、という話になった時、友人は反応という以前に、ある所で音が一時止ってしまったことがある、と述懐したのである。ある一つの音楽を聴いた途端、彼女は反射的に五感の全てを耳にしてしまう。そしていつの間にか頭の中では無数の音符が踊り出して、純粹に音楽そのものを楽しむことができなくなってしまうことがあるという。言葉(詩)はまるでどこかに飛び去り、音符たちが頭の中を舞うらしい。ふーん、そんなものか、と私は思う。オタマジャクシの乱舞など、音痴の私には絶対に起こり得ないことだ。先の脚本家にしてもかの友人にしても、音楽により親しみ、知っているが故に、ある場合に於いては、その音が邪魔をし、あるいは純粹に音楽を楽しむことができないということになるのだろうか。音楽に精通する彼女と、クラシックであれロックであれ、はたまた演歌であれ、その時その場に應じて何でも許容してしまう雑駁な私と、本当はどちらが幸せなのだろう、と考えさせられてしまう。さすれば——と思う。「知る」ということは一体、ど

うということなのだろう。

私の息子の一人は音楽が苦手である。決して嫌いなのではなく、音楽の授業が苦手である。彼によれば、オタマジャクシが解らないし、まして半音上ったり下ったりするに至っては「頭の中がまるでゴチャゴチャしてしまう」のだそうである。しかしながら彼の生活の中には歌がある。ハナ歌が大好きだし、アニメの主題歌にしても二、三度聴けばたいには覚えてしまいうらしく、よく口づさんでいる。親たる私は、何度聴いても口から出るメロディーは頭の中にある曲とは似ても似つかず、娘にソレ何ノ曲ナノ?と冷やかに問われて気を悪くするといっていたら、くである。

音楽学の苦手な息子は多分、学校生活を送る間は、その成績に悩まされることになるであろうが、それはそれで致し方ない。いやむしろ構わないのだ、と思う。もし、音楽学を強要すること、音楽コンプレックスはおろか、彼の生活から歌を口づさむことさえ奪うことになると思えば、その方がずっと寂しいことと思うからだ。